

# 貧困住民層のライフコースと成人教育の課題

ホギーン・ツェグ：絶望の淵からの報告

ダグワドルジ・アディアニヤム\*

エンフオチル・フビスガルト\*

高橋 満\*\*

この研究は、モンゴルの体制転換後、人びとが首都ウランバートル市郊外に広がる貧困ゲル地区にいかなるプロセスを経て流入し、そこで貧困な生活にどう対応してきたのか、そもそも、どうして貧困のなかにありつづけるのか、ハシャアのなかに含まれる複数世帯の共同生活、その世帯間の生活保障機能の態様などの実態を明らかにすることに課題がある。

この地区の人びとは、体制転換後の変動のなかで、労働の場である社会主義企業体の解体や解雇をとおして職を失い、新しい労働と教育の場を求めてウランバートルに流入する。しかし、住民登録を失うことを契機として社会保障などの生活保障からも排除される。ウェイト・ピッカーなど、極限の厳しい生活を支えるものは家族や親族による支援であり、行政や NGO による支援がこれを補完している。

キーワード：貧困、ゲル集落、排除、親族による支援、成人教育

## 研究の課題

ホギーン・ツェグ。それは都会から日々吐き出されるゴミの捨て場所。

この周辺に居住する人びとは、このゴミ捨て場からリサイクル可能なゴミを選び分け、それを売って日々の生活の糧にして生活する。このプロセスは、まるで彼らの人生そのものだ。革命後の混乱のなかで職を失い、豊かな生活を夢見て地方から都会へ流入してきても、彼らを待っていたもの、それは劣悪な環境の労働だけである。極寒のなかでもストーブのない生活、粉塵のなかでの仕事で身体を壊していく人たち。こうした人たちが折り重なるように生活する。

ホギーン・ツェグ。それは零落した貧困層の人たちが集積する、暮らしの場でもある。

モンゴルは、1989年の社会体制転換により劇的な社会変動を経験している。とりわけ、首都ウラ

---

\* 教育学研究科 博士課程後期

\*\* 教育学研究科 教授

ンバートル市（以下、UB市という）には、さまざまな社会的理由により流入してくる貧困化した住民が集中し、ゲル集落を形成している。

こうした都市貧困地域はどのように形成されるのだろうか。彼らはどのようなプロセスを経て都市スラム地域に流入し、定着するのか。貧困のなかでいかに生活しているのか。そして、成人教育は、こうした地域に住む住民たちにとってどのような意味を持つのか。教育者は、いかなる実践を展開しているのか。これらが、私たちの研究の主題である。

これまで私たちは、UB市に流入してきた貧困層の調査にもとづき、彼らの経済的な貧困が、失業や就業の劣悪さや不安定な状況から生まれることを明らかにするとともに、これに対応する世帯形成の特徴などを報告してきた（アディアニャムほか 2010）。また、これに対峙するコミュニティ・ラーニングセンターにおけるノンフォーマル教育の実践の内容と意義を明らかにしてきた（高橋ほか 2009）。

しかしながら、革命以後、人びとがいかなるプロセスを経てこの地域に流入し、貧困な生活にどう対応してきたのか、そもそも、どうして貧困のなかでありつづけるのか、ハシャーのなかに含まれる複数世帯の共同生活、その世帯間の生活保障機能の態様などについても明らかでなかった。先の2つの報告を架橋する意味で、ホギーン・ツェグに分け入ってよりインテンシブなヒヤリング調査を実施した。その報告である。

## 1 見捨てられた地域と人びと

### 1.1 イヘナラン地域と暮らす人びと 地域の概況

#### 調査地区の位置

ソングノハイルハン区はモンゴルの首都 UB市の西部に位置し、人口と面積で一番大きい区である。面積12万1千ヘクタール、25のホロー（行政の単位）、人口は23万2千人、52,770世帯がある。全人口の63%がゲル地区に生活している。土地の77%が農牧業用地、20%が森林で、UB市では家畜頭数が一番多い区でもある。

社会主義時代から建設された大規模な工場が多数あるが、社会体制の移行につれて私有化の波により倒産した企業が増大し、それに伴い失業人口も多くて、最も貧困な区とも言われている。

今回の調査地域は、この区の第4ホローの第8ヘセグ周辺の世帯である。行政情報によると、この第4ホローは、8つのヘセグに区分されており、人口12,738人、2,683世帯、面積は900ヘクタールである。主な食料品である食肉、小麦粉、ミルクなどを生産するモンゴルでもっとも大手となる小麦粉産業のアルタン・タリア社、肉製品のマハ・インブケス社、乳製品のモン・ソ社などの工場がこのホローの区域で生産を行っている。これらの工場を抱える第1ヘセグから第5ヘセグまでは、1960年代から1980年代の社会主義体制下に移住してきた人びとが居住しており、彼らは比較的安定した仕事や収入源、ハシャーと家の敷地の所有権、学校教育などの様々の面で、アパートに住む市中心の市民と変わらない社会サービスを受け、市民権や社会参加もすすんでいる。

## イヘナランの生活 見捨てられた人びと

これに対して、対象地とした第8ヘセグは、イヘナランとも呼ばれて対照的な性格をもつ。この地区は北部の丘陵地帯に接続しており、空き地が僅かあったため、近年、地方からの移住者が大量に移住し住み込んでいる地区である。イヘナランは、「人口が一番多く、貧困率も一番高い」(ヘセグ長)にもかわらず、新しい移住者がやってくるのは、定着し易いゲル地区や空き地がある他に、もう一つの原因として、この地区にあるゴミ処理場にあると考えられる。近年モンゴルのメディアにも、取り上げられようになっている ゴミ処理場に頼って生活する者たちが集住する地区である。

この地区は住民の流入によって丘陵地域を這い上がるように無秩序に広がってきた土地である。したがって、上下水道の整備や住民の生活を維持するための行政サービスからも取り残された地区である。例えば、次のように生活環境の劣悪さが指摘されている。

うちのヘセグは、以前は今のよりも大変な状態でした。井戸がない、谷が多くて。ヘセグ長を始めてから色々動いて、それらの谷を土で埋めてもらって、そこに新しい住民が家を建てたのもあるし、「公共経済開発プロジェクト第2弾」というプロジェクトの期間中に色々要求して行って、第29グダムジに井戸を建ててもらった。一時と比較的よくなっています(番号34)。

この地区には、ゴミ処理場がある。しかしながら、この地区に住む住民たちの生活ごみの回収サービスは不十分である。この結果、地区内の谷に生ごみを廃棄するために衛生環境も劣悪である。

主人：そう そう、常にそうしてゴミのトラックが来ているけど我がグダムジ(一列)だけは通らないです。

主婦：なんか、ちょうどここあたりは通ってくれないのですね。

主人：他を見ていると常にトラックが回っているのです。谷があるからなのかどうか分かりません。イヌの糞も多くて。

主人：清掃しろと行ってきて、清掃をさせるのもあるのにね。

主婦：そう。トラックがよく来てゴミを積んでくれていれば、谷にゴミを棄てる必要がないのにね。

主人：そう そう。私たちも、ハシャー内でゴミをずっと集めていて、ついに仕方なく谷に棄ててしまっていますよ。嘘を言っても仕方ないから(番号31)。

主婦：うちの北側に近くにそういうゴミ捨て場がありました。春になると大変です。周辺の世帯が灰(石炭の)を棄てて、それが南側の世帯の方へ春の風に吹かされて飛び散って。非常に苦しいから(番号31)。

UB市でもっとも貧困層の堆積している地区、住居や生活条件・環境ももっとも劣悪な地区、そこに暮らす 見捨てられた人びと が私たちのインタビューの対象である。以下では、今回の調査の対象となった世帯の特徴を簡単に確認しておきたい。

貧困住民層のライフコースと成人教育の課題

1.2 対象世帯の経済的・社会的特徴

私たちは、すでにこの地区の住民調査の特徴を分析してきた（アディアニヤムほか 2010）。対象者・世帯の経済的・社会的な特徴を確認しておきたい。

表 1 対象者の世帯構成と経済的状况

番号	世帯構成	就労状況	Q1 家族の収入の内訳 (単位: Tg)	Q2 収入額 (単位: Tg)	Q3 支出額 (単位: Tg)	食費・教育費の額 (単位: Tg)	Q5 借金状況 (単位: Tg)
17	核家族世帯+核家族世帯	夫45:木工自営、妻41:無職	夫の収入70,000~300,000(平均15万)、政府からもらう25000、児童手当2人分22600	⑤ 15万~20万	30万	食費=約15万	②ない
22	核家族世帯	夫58:障害者年金、次女34:建築工、三女26:店員	その他家族員の収入5万、障害者年金81000、児童手当2人分22600、親族の仕送り3万	⑤ 15万~20万	10万(?)	食費=約9万/教育費=1万	①ある:13万Tg、理由:重税代やゴミ収集代の不納
24	母子世帯	母40:ボトル洗い	家庭主(母)の収入	⑤ 15万~20万	20万	食費=約10万/教育費=2.5万	①ある:50万Tg、理由:重税代の不納
25	父子世帯	夫42:木彫工	父(家庭主)の収入約10万、児童手当2人分:22600/時々母の親族の人が金や食料をくれている	④ 10万~15万	16万	食費=約7万/教育費=1万	①ある:5万Tg、理由:重税代の不納
27	母子世帯+核家族世帯	妻47:私営会社勤務	世帯主(母子家庭の母親)の収入12万、児童手当子ども一人分11300	④ 10万~15万	9万	食費=約6万/教育費=?	①ある:80万Tg、理由:大学を卒業した娘の授業料を借っているため
31	三世大家族	夫45:溶接工、妻43:無職、長男22:木彫	夫の収入:75000、児童手当2人分:22600、息子の給料から:5万	④ 10万~15万	34万	食費=約15万/教育費=3万	①ある:55万Tg、理由:
33	核家族世帯+母子世帯+核家族世帯	母42:ゴミ収集	ゴミ収集での収入:約9万、児童手当2人分22600	③ 5万~10万	9万	食費=約4.5万/教育費=0.5万	①ある:5万Tg、理由:石炭を使ったが代金を払っていない25000、食べ物や店から借りた代金29000
34	母子世帯	母41:ヘセグ長	家庭主(母)の収入:32400、児童手当3人分33900	② 0~5万	5万	食費=約4万/教育費=1万	①ある:40万Tg、理由:冬燃料を買うためにワールドビジョンから借りた

表 2 対象者の社会的保障・教育の状況

番号	家族構成	Q2 収入額 (単位: Tg)	住民登録	医療保険	自分の医療診察	子どもの医療診察	政府やNGO団体の援助経験	義務教育未修了者	非識字者
17	核家族世帯+核家族世帯	⑤ 15万~20万	○	○(18000Tg)	診察を受ける、世帯保健所で	診察を受けさせる、素早く	×	×	
22	核家族世帯	⑤ 15万~20万	○	(定年者)政府	診察を受けませんが入院は出来ません	受けさせる	×	×	×
24	母子世帯	⑤ 15万~20万	長男登録なし	×	ホローの医師に診察を受ける	受けさせる、お金がないので9年普通教育を受ける	ワールド・ビジョンから三袋米買っていた。6.	二人の息子	×
25	父子世帯	④ 10万~15万	×	父が無登録	父、長女と母二人はかかっていた。	診察を受け、お金がない時受診を延期することに。	掃除に参加した際、ホローから、米などを貰っていた	三人がいる。父親、長女と弟、Boidsaihanは第65学校を五年目から中退した。母親の体調が悪くなって、兄弟の面倒を見る為に退学した	一人がいる。Boidsaihanは読むこと、書くことが難しい。長女も少し難しい。
27	母子世帯+核家族世帯	④ 10万~15万	○	×	金がない為、診察を受けることができない	必要が生じれば受けさせる	×	×	×
31	三世大家族	④ 10万~15万	移転時なし、その後修得	×	○	○	ワールド・ビジョン子供発達プロジェクトに子供が掛かっているため、米を貰っていた。お土産も一回貰った。子供用服配給されたがサイズが合わなかった。	×	×
33	核家族世帯+母子世帯+核家族世帯	③ 5万~10万	×	親、子どもは後に登録	○	○	○	二人の娘、第92学校に入った頃、父親がゲルを売ってしまっ、彼方方転々生活するようになった。今NFEのゲレルセンターで勉強している。	×
34	母子世帯	② 0~5万	○	×	ホローの医師に診察してもら	受けさせる、国により医療保険がかけられているので	ワールド・ビジョンからゲルを買った	息子、七年	×

表 1 は、対象地区世帯の経済的な状況を示している。先の論者でも指摘してきたように、UB市の平均世帯収入は40万 TG (トグリグ) であり、貧困ラインは一人当たり10万 TG である。この表にみるように、対象世帯はそのすべてが平均収入を大きく下回り、一人当たりの貧困ラインでも極めて低い数値となっている。つまり、これらの世帯は極貧のなかで暮らしを送っている。

この要因は、世帯のなかで就労している世帯員がほとんどいないという労働の状況を反映している。これらの世帯の収入の基盤は、児童手当、年金などの社会保障によるものであり、現在ではこ

のうち児童手当制度自体が廃止されていることを考えると、この調査時点ではより厳しい生活に陥っていると考えてよいだろう。すべての世帯で借金があり、それも電気代や、冬季間の燃料代の未納など、生活のもっとも基本的な支出のための借入であったことがわかる。

表2は、社会保障と教育の状況である。住民登録をしていない世帯員を含む(一時期、含んだ)世帯が4世帯ある。医療保険については、6世帯で未加入の世帯・世帯員が存在している。義務教育未修了者も5世帯で存在しており、労働権とならんで社会保障の権利や教育の権利から排除されている人びとが少なくない。

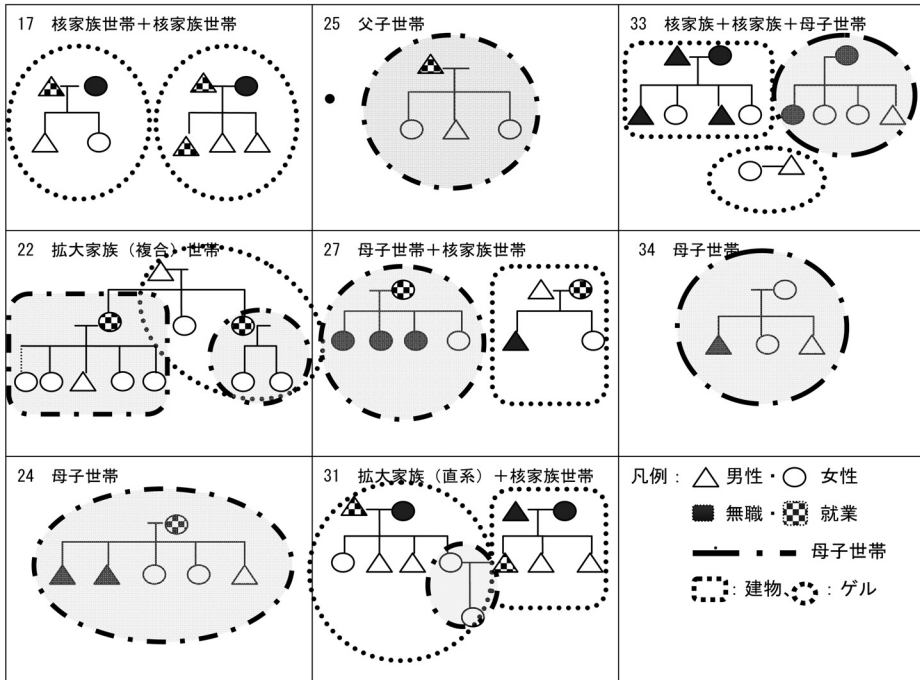


図1 対象世帯の家族・世帯形態

最後に、図1により世帯構成を確認しておこう。特徴的なのは、ハシャー内に複数の世帯を含む形で生活していること(番号17, 22, 27, 31, 33) なかでも、母子・父子世帯、母子ユニットを含む世帯が多いことが明らかであろう(番号22, 24, 25, 27, 33, 34)。

これらの経済的貧困、社会保障や教育など社会的権利からの排除、母子世帯の形成などの諸特徴がいかに形成されてきたのか。そのもとで彼・彼女たちが、どのような生活を送ってきたのか。これらの諸点を究明していこう。

このプロセスを鳥瞰するために整理したのが、図2「体制転換後のライフコースと生活対応」という概念図である。転換後の生活を区分する指標として、①体制転換前、社会主義体制下の労働と生活(2.1「社会主義体制下の生活基盤」)、②転換後からウランバートル市への移住まで(2.2「体制転換による失業と流動化」)そして③ウランバートル市における労働と生活(3「地位身分の喪

失と不安定な居住」と4「劣悪な労働、不安定な就業」、5「極限の生活と親族の支援」)の3つの時期に分けることができる。この経過をたどりながら具体的な対応のプロセスを明らかにしたい。

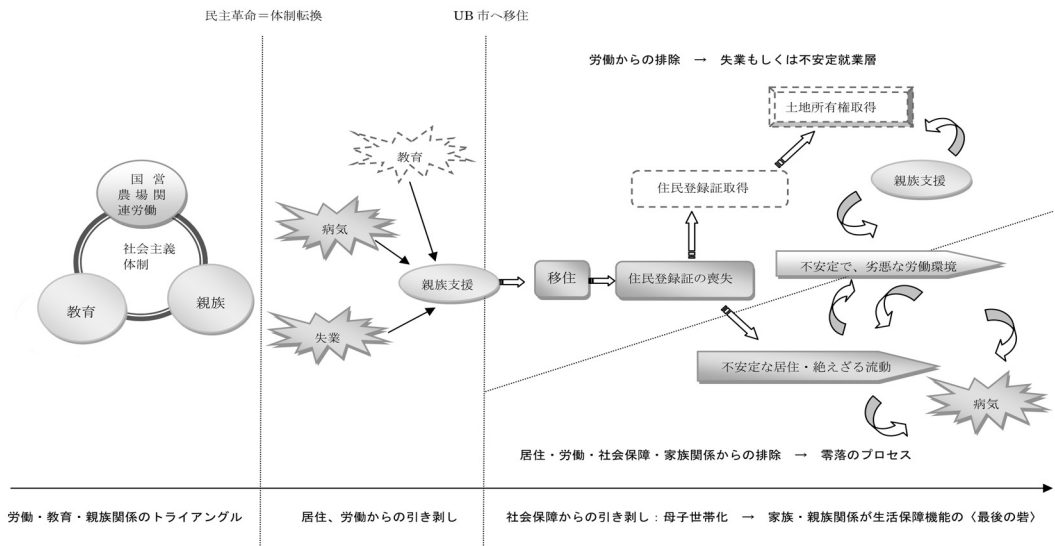


図2 体制転換後のライフコースと生活対応（概念図）

## 2 体制転換と零落のプロセス

### 2.1 体制転換前の生活基盤 国営企業体での労働

この研究は、体制転換後の人びとのライフコースと生活の対応を明らかにすることが課題である。そのためには、社会主義体制下において対象者たちがどのような労働と生活をしてきたのかをみる必要がある。大よその特徴をみていくことになるが、体制転換前、対象者たちの生活の基盤である働く場は、国営企業や企業体に関連する機会であった。

次の語りにみるように、人びとの生活は、国営農場を中心にして、暮らしの場も、労働の場も、そして教育の場も一体的な関係にあり、このトライアングルに包み込まれるように人びとは安定した暮らしを送っていたのである。

：そうですね。社会が変わる前は、兵役から帰ってきて、仕事はしてなかったということですね。

T：はい。それより前は、私、Ugtaal（ウグタール、中央県の一つのソムの名前、社会主義時代は国営農場があった場所）の専門学校を卒業して、トラクター・コンバインの運転手という専門の資格を取った。両親は中央県のZaluuchud（ザルーチュード）旧国営農場に住んでいた。母親は国営農場の乳搾りをして、私はトラクターの運転手をしていた。それから兵役に行きました（番号25）。

次の引用からも、安定した暮らしの様子をうかがうことができようが、体制転換によって、こうした暮らしは一変する。つまり、民営化によって突然に基盤は崩壊する。

A：当時の給料は良かったよ。月に2回、そして良く働くと追加給料も常にもらえて、良かった。それから工場が破産して、仕事がなくなって、ウランパートルへ兄弟が先に行って、それから私 came。ウランパートルはやる事ができれば、仕事は見つかることは見つかるのです。ただ、環境が苦しい仕事ばかりでね。最近では体が労働を持たなくなった面もあるようです。体調悪くなったり。この間のボトルリサイクル工場には5年も働きました(番号24)。

：2000年まで、国家行政員でもあったのね。

S：県庁の会計係、経済課の課長、ソム役場の副長などをしていた。ずっと国家公務員をしていた。最後に、ソムの副長から県都のその家畜用意代理店に来て、そこの総合会計係になって、17、18年間働いたところ、そこが民営化されて、仕事がなくなった。...2000年にお肉コンビナートが民営化されてしまって、ジェンコ社が所有するようになって、うちの代理店が引き下ろされて、従業員の我々が失業者になった。だからそれ以降、仕事をする事ができなかった(番号22)。

旧東欧の社会主義国と異なり、支配政党にかかわった人びとが政治的に追放されるプロセスをとることはなかったが、市場経済への移行にともなって国営企業体で働いてきた人たちは、労働の場を失っていく。この点については、後に再度触れることにしよう。

### 変革への対応

1989年、モンゴルは民主革命によって社会主義から資本主義へと体制転換を実現した。この対象者の人たちの民主革命の受け止め方は多様である。ある人は、資本主義体制とは何なのか。市場経済とは何か。自分たちにとってどのような意味をもつのか。全く方向性を失う状況であったという。

受け止めるに関しては、この辺がいいのかなどと思ったこともなく、理解が浅かったような気がします。どっちが良くて、どっちが悪いのかの区別すらつかなかった。一体なにがどうなっているのか、将来どうなるのか、市場経済って何なのか、社会主義はどこが悪かったのか、どうやってその移行ってものが展開するのか、と、目を丸くしたような状態でした(番号22)。

しかし、多くの市民たちは変革を歓迎し、その運動に参画した経験をもつ。つまり、民主革命を積極的に受け止めていた。

主人：市場経済が始まっていた当時は民主主義が始まった、たくさんの新しいモノが入ってきていることを聞いて、プラスに受け止めていた(番号25)。

：民主化が現れた時期からお宅の皆さんはそれを応援していたということですね。

主人：それは応援するよ。非常に良かったよ、その民主化が始まった当時は。

主婦：そうですね。何もかも新しくなるといわれて。

長男：だから、僕もゾリグ氏(民主運動の第一人者、後に暗殺された)を応援していた(番号33)。

あるいは、市場経済への移行をビジネスチャンスとしてとらえた住民もいる。

車などを売って、(その資金で?)あの、90年代初頭の頃の社会潮流に流され、ビジネスをしようとして都市へ行って、「英雄になる」ことを夢みていた。それでも、何もできなかった。できないものだね(番号33)。

## 2.2 体制転換による失業と流動化

### 労働からの 引き剥がし

ある人は民主革命を熱烈に支持し、経済的な成功を夢見た人びとは少なくない。ある人はそこにビジネスチャンスを垣間見、比較的好意的に変革を受け止めたが、しかしながら、彼らを待っていたのは零落の運命であり、厳しい生活の現実であった。

まず、生活の基盤であった労働からの 引き剥がし である。この労働からの 引き剥がし には、体制転換にともなうものであるがゆえに、いくつかの基本的パターンがある。第1に、移行過程で市場体制への対応の施策として設定された「定年制」にともなう失業である。

私はその1990年から97年まではTETS(火力発電所)で働いていました。そこでリストラされて退職させられました。高齢者も、また7年制や8年制の学校を卒業しただけの学歴の人も全員退職させることとなって、10年制以上なら残すとなって(番号31)。

私は7年制を終えて、専門学校へ進学したので、そのリストラの対象になりました。それ以降は、たまたま仕事があるけれど、ほとんど見つからなくて。いまは、もっと年もとってきたし、ほとんど見つからなくなりそうだね(番号31)。

第2は、国営農業や農場関連の事業所で働いていた人たちは、その事業所の民営化によって職を失っていった。これについては先にもみたが、再度確認してみよう。

主婦：ちょうどその時期に私が仕事を失って、(夫：二人とも仕事失ったよ)91年に次男を産んでから仕事なくなりました。夫もちょうど当時、SOTが廃止されたのでロシア人も地元へ戻ったし。こうして同じ時期に二人とも仕事なくなった。私はちょうど、次男を生んで有給休暇が終わってから仕事に戻ろうとしたら私有化されていて、自分たちの好きな人を仕事に入れていた(番号31)。

SOTとはソビエト建設公社であり、この夫はそこで鉄骨組立工として働いていた。民営化による失業は、それまでの生活の基盤が、国営企業における労働、これと結びついた居住、そして付属する学校という三者の一体的関係があっただけに、市民たちの生活を、その根本から揺るがす事態であった。

### 零落の契機 家族員の病気や死亡

まず、対象者たちの零落の過程は労働からの 引き剥がし からはじまる。しかし、それだけで



はなくて、彼らが今日の境遇にまで陥るには、もう一つの困難な状況が加わっていることがわかる。それが、家族員の病気や死亡であり、それを契機に地方の居住地を離れてUB市へ移住することを決意することになる。次のインタビューをみると、それが、はっきり理解できるだろう。

子どもたちがここにいたことと、女房の体調が優れなくて、ウランバトルで治療する必要があったので。肝臓ガンでした。移住することになった理由はそれです。女房の治療は主な目的でした(番号22)。

この他、家族員の病気(番号25、33)や、夫、父親の死亡(番号33)をきっかけにして故郷を去ってUB市への移住を決意している。

### 居住地からの引き剥がしと移住

こうした契機をきっかけに移住を決意するが、UB市に移住する際には、それを支援してくれる人たちを頼って居住地を選択していく。もっとも重要な支援者は、いうまでもなく親族である。

：弟のハシャーに住んでいたということですね。そこで長く住みましたか？

結構長かったよ。2000年に来て弟のハシャーに住んでいて、それからまた他の人のハシャーへ引っ越した。例のT氏のハシャーでした。そこからまた引っ越して、Mal tuuvar(地名、幾つかのグダムジを含む、同一ホローの領土にある)の一つのハシャーに、Y氏のハシャーにもいました。そうして2、3箇所ものハシャーを通った(番号22)。

子どもたちを連れてみんなでセレンゲ県から来ました。母親とさっきの妹が先にウランバトルへ来ていました。我々より、3、4年前に。なので、セレンゲでは兄弟もいなくなって、子どもたちと住んでいたところ、この2人がウランバトルへ引っ張ってくれた。そして、ここにゲルを建てて、ずっとハシャーなしで住んでいて、この間やっとハシャーを建てた。

：99年からずっとハシャーなしですんでいたんですか？

はい。ハシャーがなくてもなんとか住み続けた。今年からハシャーが出来て、楽になりました。困らないと不便でした(番号25)。

親族を頼ってUB市へ来た人たちは、別の面からみると、その後の生活でもこの親族からの支援を期待できるということを予想させるし、実際、そうした関係があることを後にみることになる。

これに対して、故郷の労働や居住地から引き剥がされるだけではなく、親族関係からも引き剥がされ都市へ流入する人たちが存在する。以下はその例である。

イヘナラン地区に来て、このイヘナランの一番片隅にある路地に引越して来ました。4人の子どもと一緒に、娘は2人。子供たちが学校へ行けなくて、一時大変でした。知合いもない、親戚もいなくて。そして、このゴミ処理場へ行きました(ウエイストピッカーの生活を始まるという意味)。当時は、住む家もなかった。この周辺の、このイヘナラン(に住む)の人達が良く知っている。そして、ゴミ処理場で働き、住む家(ゲル)を持つようになった。ホロー行政の支援でゲルに住むようになりました(番

号33)。

つまり、番号33は、彼らの生活を支える主要な絆をすべて失った上での移住である。後にみるように、くわえて住民登録証の喪失により国家との制度的な絆を失うとき、人びとは 最底辺 の社会的な位置に零落せざるをえない。

こうしたプロセスと生活の状況について、よりくわしい考察をすすめよう。

### 3 地位身分の喪失と不安定な居住

#### 3.1 住民登録の喪失とその意味

こうして対象となった人びとは、地方の故郷から 引き剥がされ、そこを離れて首都 UB 市に家族ぐるみで移動する。その際に、一部の世帯、あるいは世帯員は住民登録移転の手続きをとることなく離れ、都市に流入していた。その理由の一つは、ある時期まで首都への登録には大きな額の金が必要であったからである。この住民登録の喪失は彼らにとってどのようなことを意味するのだろうか。

#### 政治的権利、労働の権利からの排除

住民登録は、これらの人たちの国民国家の成員としての地位身分を確認するものであり、とりわけ、政治的な権利、あるいは社会保障・社会福祉サービス、教育を受ける権利など、社会的権利の享受を保障するものである。以下の語りは政治的な権利と労働権にかかわるものである。

：Tさんは選挙にも参加することができないということですか？

できないです。身分証がないから入れてくれない。代わりに何か仮のものをホローなんかから出してくれる方法があるかどうか。あれば参加できるかも知れないけど。女房が生きていた頃は女房だけが選挙に参加していた(番号25)

：身分証はなんとかしないと生活は先へ進まないのね。仕事の方も。前の会社で働く時はどうやって契約を結んでいたんですか？労働契約は結んでいたでしょう？

その会社は私が身分証がないことを知っています。私を登録して、税金も払ってはいるといっていました。「10万くらいあれば身分証の再発行の手続きはできるでしょう、簡単なことだよ」というけどね。身分証がないので(自信がなくて)何がどうなっているのか詳細に聞いたりすることができなくて、それを利用して給料を少なくしているんじゃないのかな、と、疑問に思う時もありますけど(番号25)。

実際に、給与額を少なくしていたかどうかはわからない。しかし、身分証がなければ労働をめぐる契約もできないということは当然みられることであつたらう。

#### 教育の権利からの排除

この登録の喪失は、子どもの学校教育の権利をも奪う原因となる。つまり、学校に子どもを入学

させるためには住民登録証、身分証明書が不可欠なのである。

私は二人の子どもをつれて(地方から)来た。(子どもたちが)学校にも入っていないと事情を説明しました。向うは赤十字から来ていますと。そして、二人の娘を学校に入校させてくれることになりました。入校することになって、身分証明書などを持って来てくださいと言われた。そのとき身分証明書はありませんでした。自分も国民証明書を持っていなかった。子どもたちにも出生証明書がありませんでした。そこで、ホロー長であるGさんの所へ行きました。Gさんに、貴方、私に証明書を下さい。子どもたちを学校に入れたいと言いました。ホロー長Gさんは、国民証明書さえ持っていない人間にどうやって証明書を出すのかと言いました。私は泣きました。この子どもたちの将来のことを考えて、学校に入れるように助けて欲しいとお願いしました。それで、ホロー長Gさんが証明書を書いてくれまして、そして、子どもたちは学校に入ることはできました(番号33)。

この事例では、ホロー長の尽力で証明書を発行してもらい学校へ行くことができたが、子どもの将来をも奪う要因となることをよく示している。

#### 住民登録のむつかしさ

もちろん、行政もこうした住民たちに住民登録の手続きをすることを積極的に働きかけている。住民たちも、その必要性を認識していないわけではない。しかしながら、一部の住民たちにとって、手続きの際に必要な手間とお金が阻害要因となっているのである。

今の例ですが、私の国民登録番号が亡くなった他人の番号と一致しているといわれて、自分であれこれ対策を取ろうとしても金がないからできなくて、どうすればよいのか、分からないままです。一度、少しだけのお金を持って、手続きをしに行っただけ、それくらいのお金だとうまくいかないことが分かった(番号25)。

ヘセグ長：はい。だから非常に色々かかる。たくさんのお金がかかります。また公文書保管所にも行ったり、市役所にも行ったり、時間もかかります。

A：そうです。何日もかかります。

ヘセグ長：この人は一度手続きをし始めても、そのうちバス代がなくなったら行くのをやめてしまう(番号25)。

手続きには料金がかかるだけでなく、手続きに行くための交通費などが必要となる。時間がかかることも事実である。普通の暮らしをしている人からすれば、その費用はわずかなものである。しかしながら、この地区の住民たちにとっては、そのわずかな出費が償えないのである。それは「バス代」が要因となっていることから理解できるだろう。

また、住民登録をする住民自身の生活スキルの欠如という問題もある。

自分はそのやり方も良く分からないです。亡くなった女房がその辺をしてくれていました。私は5年

生の時に父を亡くして、母は兵役から戻ってくる前の年に亡くなった。それで私はそういう手続きみたいなことには全然知識がなくて、弟、妹の面倒を見て育てることで精一杯でした。そういう生活ばかり送ってきたのです（番号25）

住民登録の欠如は、みてきたように、政治的権利や労働の権利からの排除をもたらすだけでなく、困難を抱える人びとを支える社会的サービスを受ける前提の欠如である。したがって、より身近で、重要な居住の基盤さえも奪い去ってしまう。しかも、居住の側面の不安定は、登録を失った人だけではなく、より広がりをもっていることが、この 最底辺 地区の特徴をなしている。

### 3.2 居住の不安定さと劣悪さ

#### 土地取得の条件

なぜ、地方を離れた人びとが首都 UB 市へ流入してくるのか。無論、都市 - 農村間の経済的格差や、社会的文化的な格差の大きさや、地方における経済的基盤であった国営企業体の解体を直接の契機とする移動ではあるが、他方で、首都内に容易に土地を取得できる制度、ゲルという移動が容易な伝統的な居住様式が関係している。

とくに、この土地取得をめぐる制度は、日本のそれと大きく異なるモンゴルの特殊性があるので、これについては前提的な理解が必要となろう。それは、ヘセグ長の説明によれば、以下のようなものである。

まず、流入してきた住民たちは、都市開発計画区域など私有化できない土地を避け、適当な土地を探してゲルを建てる。あるいは、最初からハシャーを建てる必要があるが、土地の周囲を囲むための材料となるバンズ（木材）は少なく見積もっても25万 TG はかかる。その後、土地の測量図をつくるために5万 TG が追加となる。こうした条件を満たし、書類をそろえることのできた者が一定の面積の範囲で所有権を得るのである。

#### 居住の不安定さ

地方から UB 市に来た人たちは、まず、親族や何らかの伝手をたどって、あるいは知人のハシャーにゲルを建てて、そこで生活をはじめ。しかも、前節の引用でみたように、長期に滞在することができずに、いくつかのハシャーを転々とする。この流動期をしのいで、やがて所有したい土地を物色してハシャーを建て、定住化していく。

しかし、最初からハシャーで囲まずにゲルを建てて居住を開始する者もいる。彼らは、冬季には厳しい寒さと風を避けるために他人のハシャーに 間借り することが多い。その時に、次のようなことが起こったりする。

私は、2ヶ月とは言わず、2年も住んだのに（ハシャー）建てなかった。生活（家計）の理由で。そのために、冬季の風雪に耐えるために他人のハシャーに移って行きました。元の敷地に戻ろうとしたら、あの人が（対象者に住んでいた敷地に移って来た人）がどうしたと言うと、（法律に定められた）

権利を主張してハシャーを立てたのです。私が「訴えてやる」といったら、(確かにあの敷地に)あなた方は住んでいました。(土地を)所有させるとしていましたが、あなた方はハシャーを建てて土地局に登録しませんでした。義務を果たすことを出来なかったんです、と言われました(番号33)。

あるいは、他人のハシャーに 間借り することは、あくまで季節的な、一時的な避難である。春になり、家主が戻ってくると、彼らはそのハシャーから追い出される。

今年はハシャーで冬を越え、今は暖かい季節になっているので、引越して下さい。私たちパイシン(固定家屋)を建てますので、こう言う状態で他人のハシャーから追い出されることになります。夏になると、ハシャーの主人はハシャーを取り戻すので、冬だけ、あちこちのハシャーを頼って寒さを乗り越えるだけです(番号33)。

新たにやってくる者たちから土地を守るためには風雪に耐えながらハシャーなしのゲルで暮らしをつづけなければならないのである。

土地所有権をえる可能性はだれにも開かれている。しかし、現実には、土地を取得するために必要な条件である、①ハシャーを建てること、②土地を測量すること、③登記の手続きをする必要があり、これは、ある程度の経済力をもつ人びとに限られる。最底辺の人びとは、彼らに追い出される結果、絶えず流動化せざるをえないのである。

したがって、次のような中途半端な所有の状態にとどまる事例もある。

ハシャーはまだ全部立てることができなくて、半分だけ周りを立てていたのでその分だけ所有権が与えられた。残りの部分を立てて、また新たに面積をちょっと拡大してもらいたいのですが、なかなか都合がつかないでいます。けっこうまた色々和金も必要になるからできないです(番号32)。

幸いにも、ハシャーを建て所有権を得ることができた人びとも、自力でというよりも、親族の支援によって条件を整えることができたという者が少なくない。

### 劣悪な住居の基盤

こうして得た土地も業者が開発・造成した土地ではない。UB市の郊外の丘陵地帯をよじ登るように無秩序に広がりつつある地帯であり、ゴミ処理場が近いために悪臭が立ち込め、衛生的にも劣悪だけでなく、大雨が降るときなど危険と常に隣り合わせの土地条件である。

以下の語りから、このような条件をはっきり読み取れる。

主婦：そう。うちは、前も、今トイレになっている辺りは自力で、色んな物を積めて平にして作ったのです。

主人：もともと、ホンの小さな面積しかなかったところに、様々なゴミ(建築のコンクリート、レンガ、土等の廃棄もの)を持ったりして大きくして、ハシャーを立てました(番号31)。

しかも、大雨の際には危険をとまなう。

主人：大雨の時、この辺は洪水があったりするところですけど

主婦：幸い、うちのハシャーへは勢いのある水が入っては来ないです。隣の谷間の中を流れるけど、向こう側の方へ勢いが当たって、壊しているけど、ここへは来ないです。

：それは良かったですね。そうでないと自力で平にして作った土地に当たって、壊してしまったら困りますよね。

主婦：それはそうですね。

主人：物凄い雨が、3、4日間続いたらその部分が流れないという保障はないけどな。

主婦：そういう可能性はあるのよね、本当に。そういう心配はありますね。

主人：そう そう。一時的な雨だとそんなに洪水が入って来ないだけです。

主婦：初めて、洪水が起きたときは、私たち、心配して書類（身分証明書など必要な書類だけ）をもって避難しようかとしたこともありました。もしかして、大水が流れてきたらどうしよう、逃げようと思いました。

主人：すごい音がして、真っ赤になった水が隣を流れてきたので怖かったね。普段、想像もしない恐ろしさがあったね。水が入ってきてないのに、すごい音がしてびっくりしました。

主婦：その時、私トイレにいて、何も気づかないうちに隣をざあ〜っと洪水が入ってきたね（番号31）。

こうした劣悪で、危険な土地条件をもつ土地に住民たちは移住してくる。親族の支援がある場合には、土地を所有することができるが、その支援がない場合には絶えず移動しながら、この地区で住み続ける。

## まとめ

住民たちは、居住ということをめくり大きく2つのグループに分化していく。一つは、住民登録を契機とするものであり、住民登録を得てUB市民として最低限の権利を享受できる人びとであり、他方は、登録を喪失し、それらの諸権利から排除された人びとである。

もう一つの分化は、これとも関連する土地所有をめぐる分化である。一方では、家族や親族の支援のもとでハシャーを建て、所有権を取得して定住する条件を得た人びと。この手続きのための経済力がないために、他人のハシャーに 間借り しつつ、絶えず流動する生活を送る人びとである。

これらの分化は、あくまで 最底辺 層のなかでの区分にしか過ぎない。それは住民登録をもち、土地を所有している人たちが豊かな生活をすることを保証することを意味しない。とはいえ、この地区に住む人びとの生活基盤の違いとして重要な側面である。

## 4 劣悪な労働、不安定な就業

このゲル集落で暮らしている 最底辺 にある人たちが、どのような条件のもとで働いているの

かを、いくつかの側面からみてみよう。

### ウェイスト・ピッカー

UB市に移住した人たちが遭遇する困難の一つは、収入の確保である。彼らの多くが、故郷の家財をすべて処分したうえで、わずかにゲルだけをもってこの地区に流れ込んでくる。親族や知人のゲル、ときには全くの他人のハシャーにゲルを建てて仮の住居とするにしても、次に問題となるのは収入である。

この地区に流入してくる理由の一つは、近くにゴミ処理場があるからであり、ゴミを漁ってわずかばかりのその日の糧とする。ウェイスト・ピッカー、ゴミの不法回収者たちである。

そうですね、はっきり言いましょう。ゴミを掘ったり、色んな物を拾ったりして、なんとかしていました。まあ、その日その日の食べるものを何とかしていました(番号31)。

やがて就業の機会を見つけて、こうした生活から抜け出ることを展望するのであるが、さまざまな要因(年齢が「定年」以上である、住民登録がない、資格がない、女性であるなど)により、こうした生活から抜け出ることのできない人たちが存在する。

収入というと、この娘、家の家計を大きく助けているのは、この真ん中の娘です。彼女が北(ゴミ処理場)へ行って、再利可能な資源ゴミを拾って、ピンなど拾って、こういう物で日々を過ごしています。一キロ小麦と他の雑貨(を買って過ごしています)(番号33)。

毎日、ゴミ処理場にあらわれ、ゴミを回収し、このゴミに混在している再利用可能な資源ごみを選別し、それを仲介業者に売ってその日の糧をえる。逆にいえば、それ以外の現金を残すような余裕などは生まれようもない。その日その日、毎日がギリギリの暮らしなのである。

基本収入と言うものではありません。ただ、今晚の夕飯に使う小麦をどうするか、今日の小売商品を買うお金をどう入手するかと考えながら生活している。それ以外の、余裕のお金は持っていません。例えば、今直ぐこの家から出かけてバスを乗って行こうとしても、私たちのポケットにはお金ありません。この周辺に行ったら、誰かからお金を借りられるか。J姉さんから200トグリクを借りるか。誰から借りられるか、みたいに、そういう状態です(番号33)。

### 劣悪な労働環境・健康破壊

明日、食べ物を確保できるかどうかも確かでない。汚く、非衛生的なゴミの山を掘り出ししながら、その日暮らしをする人びと。極限的な生活条件のなかでの暮らしである。しかしながら、それ以外の仕事も収入の額には違いがあるにしても、これに劣らない劣悪な環境にある。とくに、年齢が高く、資格のない場合には、いい仕事を見つけるのは困難である。彼女たちがを見つけることのできる仕事は重労働であり、健康を破壊するほどの劣悪な環境のもとでの労働である。

ボトルのリサイクルのための洗浄作業は、そうした仕事の一つである。労働の様子を覗いてみよう。

：ボトルは手で洗っていますか？

手です。お風呂用のバスに入れて、シールと蓋をはがして、擦るなど多くの手作業がかかります。女性には結構重労働です。…小さいボトルが12トグリグ、大きいボトルが20トグリグなどサイズによって異なってきます。出来高で給料が計算されます。

：お湯ですか、冷たい水ですか？

お湯です。出来高で給料をもらうからお金のことを第一に考えて、体のことを気にしないで働いてしまうのです。一日1000～2000個のボトルを洗います。それも少ない方です。

ヘセグ長：一時は娘と2人でボトル洗いをし、生活が結構良くなったよね。この間の冬、少なくとも家の中が寒くなかった。

この厳しい労働も、カシミア工場やレンガ工場の労働と比較すると、まだ良いと認識されていることに驚きを禁じ得ない。カシミア工場、レンガ工場の順で、その様子を見てみよう。

まず、カシミア工場である。

年齢の条件があって、我々には見つかったとしても重労働だけです。カシミア工場らは常に労働者を募集しているけど埃だらけの中で働くことになるのでできないのかなと懸念しています。常にマスクをつけるのも慣れてないんで。ボトル洗いは比較的自分のペースで働いていた。休憩室もあるので自分の都合に合わせて、休憩がとれていました（番号24）。

レンガ工場でも、健康を破壊するような条件のなかで働きつづける。

レンガ工場で働いていたけど、そこは埃がおおくて、それで鼻血が一回でると2、3時間も出続けるから、かなりの出血になってしまったことがあります。そうすると気を失って、あっちこっち倒れてしまうし。それでもモンゴルの女性は非常に不屈なので、働き続けてこうっています（ヘセグ長）。

資本主義的発展の初期段階、マルクス『資本論』の工場法の記述を彷彿とさせるような劣悪な労働条件が放置されている。こうした労働条件は、少なくとも、この地区の人たちの条件としては決して例外的なものではない。以下は、市場の食堂で働く女性の証言である。

私の仕事は今朝終わったので明日は休みます。

： あ、夜間も働いているということですか？

そうです。私の仕事は朝までなのです。今日、明日休んで、明後日の朝から明々後日の朝までです。ですからそんな朝は疲れて、何も考えられなくなって帰ってくるのです。頭が痛くなったりして。

： ああ、24時間働いているということですか？

そう そう、24時間です。夜間だって人が多くて、食堂だから。



: はい はい。お客さんが多いということですね。

5、6人が1組みとなって働いています。夜中は交代で少し休憩を取って寝る場合もあるけど最近殆ど休憩できないでいます。

### 季節労働、不払い労働

男性とはいえ、年齢の高い人たちにとって安定した雇用先を見つけることは事実上不可能である。そのとき、彼らは、季節的に必要とされる募集に応じて臨時的な就業先を見つけ出す。

レンガ工場やカシミア工場ら、私が働く場所もそういう季節的な稼働ですからね。4月から9月、遅くても10月まで稼働します。こういった私立の工場は、一番、負担の多い時期にそうして閉鎖してしまいます。ボトルリサイクルの工場は違います(番号24)。

いいえ、二人とも失業していますよ。夫は夏季になると溶接などをして少し収入を得ています。建物を建てる人たちと一緒に、田舎へ行ったり、都内のどこかへ行ったりしています。この間聞いたのですが、まだ始まらない、5、6月になったら仕事が始まるという返事だったようです。

: 外はまだ寒いからね。

そうですね(番号31)。

では、若い人たちに仕事があるのか。少しは条件がいいことは確かであり、子どもたちが働くことのできる年齢になることによって、生活は少し改善をみる。しかし、若い人たちにとっても、労働条件は厳しい。不払い労働も横行していることを訴える声が少なくない。

20歳の息子はあっちこっちで働いたりするけど、いつもボランティアをやっているみたいに給料のない仕事ばかりしていつているのよ。また仕事を探しにでかけています。確かに、そのバーで一時働いて1トグリグももらってない。どういうところだからそうするのか、分かりません(番号24)。

私が働いていたところは大丈夫でしたけど、他のところはまた、全部民間の企業なので給料をちゃんと払わないところがあると聞いています。なので、信用できるところで働かないと民間企業は大変といえば大変です(番号24)。

### まとめ

この地区の住民たちのすべてが、ここで報告したような劣悪な環境のもとでの労働、健康をも破壊するような労働をしているわけではない。対象世帯は、もっとも 最底辺 にいる人びとである。そんな人びとの労働の特徴を象徴するのはウェイスト・ピッカー、ゴミ処理場でゴミを回収し、それを選別して売ることにより生活の糧を辛うじてえている人びとである。

しかしながら、彼らがもっとも過酷な労働をしているともいい切れない。より劣悪で、健康を破壊するまでの労働は、民営化された工場生産の一部の労働である。これがボトルの洗浄労働であり、

モンゴルを代表するカシミヤ生産工場であり、UB市の再開発にともない活性化している建築市場に材料を提供するレンガ工場である。

零落のプロセスのなかで、収入はいいが、健康を害するほどの過酷な労働につかざるを得ないという段階は決定的である。なぜなら、健康を害することによって、こうした収入をえるすべての機会から排除されていく境遇に陥ることになるからである。

## 5 極限の生活と外部からの支援

### 極限の生活状況

対象世帯の月収はおおよそ3万から20万トグリグである。そんなわずかな金額のため、日払い労働の場合はその日の収入をその日の内に使ってしまう、月払いの場合であれば給料から給料の間に借金をせざるを得ない状況にあることがわかる。

ヘセグ長：その長男は一時、マイクロバスの車掌をして、この人たちを食べさせていた。そのため、朝早く出かけて、夜遅くかえってきていました。それで、なんというか、その一日の収入を即座に使ってしまって（番号24）。

：今は、この家の収入はTさんの給料がすべてということですね？

T：収入ですか（笑）今は給料がないんだよ、私。昨日は朝早く、長男を連れて出かけて、やっと7,000トグリグを得た。それで昨日3袋小麦粉の麵を買って、（家畜の）臓物と混ぜて、晩ご飯を作ったべた（番号25）。

母：私は今、ハルホリン市場の北側にある「ハーン・ブーズ」レストランで働いています。この娘を医学大学に入れるために、授業料の55万をようやく払えた。そして、給料から給料の間に人から金を借りて過ごしています（番号27）。

また、前節でいう季節労働、不定期的な就労機会が原因で日々の家計の状況も季節的に変動している。建設など季節的な労働が見つかり易い夏季は収入が比較的多く、燃料代や冬着購入の必要のないことから支出も少ない時期である。これと逆に、秋の終わり頃、冬季始まりから来年の春が明ける時期までは仕事が見つかりにくく、まして石炭など燃料代や厚着が必要なため家計への負担も増加する時期である。上述した月収の額も収入の多い時と少ない時、あるいはない時の平均で出している数値であり、決して毎月均等な額を得ている訳ではない。

奥さん：それが終って、建物の利用が開始されてから仕事がなく、この冬は仕事なしで過ごして、最近、今の仕事の注文が入ってきたところです。

：そうですね。建築の作業は冬になると止まってしまうからね。

奥さん：なので冬は私の負担が（昨年からホテルのクリーニングで働いている）...（笑）

ヘセグ長：人々が一番楽に過ごせる時期は学校が休んで、秋にまた学校が集まるまでの間ですね。子ども

もたち(学校)が色々請求してこない、石炭など燃料の問題で心配しない、暖かい服を買わないといけ  
ないということもなく(笑)(番号17)。

ヒヤリングを行った3月はちょうど、冬季が終って、春が始まってはいるが、外はまだ寒く、夏  
季に始まる季節労働の募集時期がまだの時であった。

ヘセグ長：例の石炭のクズからストーブにどうして入れないですか？

A：今日は暖かいからといってストーブをかけていない。少しだけの石炭があるのでそれで夜になつた  
らストーブをかけようと思って。寝る前に

：今日は外の気温はマイナス何度ですかね？

ヘセグ長：マイナス8度くらいかな。私のカバンにライターが入っているはず、温度計がついている。  
そういえば、家の中はほとんど外と同じじゃない?(笑)。

ヘセグ長：(ハーと息を吐いてみて)口から蒸気がでるの見えるよ(笑)(番号24)

S：実態をいうと生活が苦しいです。貧乏。今日の例だとストーブに入れる燃料がない。買いたいけど  
金がなくて。

ヘセグ長：私たちがインタビューを取りに回った世帯らの殆どはこういう状態ですね。

：うん。

ヘセグ長：みんな燃料がない。

：お宅はもうちょっとマシですね。家だから。ゲルの世帯はこれよりも寒かった。

ヘセグ長：そう。ゲルの穴から外が見えるところもあった。

S：こういう状態だね。長年働いたのに財産を溜めることができなかつた人は段々こういう状態まで落  
ち込んでいます(番号22)。

極寒のなかでもストーブで暖をとることができず、昼間から布団をかぶるようにして何とか凌ご  
うとする人びと。季節的な労働と季節そのものの影響の下に直接的に置かれていることが明らかで  
ある。

### 家族基盤の脆弱化

横石多希子(高橋ほか 2009)は、調査対象ゲル地区における核家族化はモンゴル全体と比較し  
ても高率であると指摘している。また、「女性世帯主」についてふれて、核家族世帯として1世帯の  
み居住している女性世帯主、核家族世帯の場合であってもハシャーの中の別世帯として居住する親  
族から支援を得ている女性世帯主、拡大家族世帯の中に含まれた母子ユニット(母と未婚子)とい  
える形態をとって生活する3つのケースが見られることを明らかにしている(高橋ほか 2009)。

こうした女性世帯主及び母子家庭が形成される要因として離婚率の上昇、社会体制転換後の社会  
変動の中での夫の失業、社会主義的な規範の解体による葛藤からの家庭内暴力やアルコール依存の  
増加など、配偶関係の安定的な関係維持を危うくする現象がしばしば指摘されている。ヒヤリング

の対象世帯の中でも次のような状況が語られた。

私は1988年に鉄道専門学校を卒業して、93年までドルノゴビ（東部の県）の鉄道に働いていました。班長、マスターを勤めていました。そして、ゴビで暮らすのが私にとって大変なところがありました。子どもの件がうまくいかなくて（産んでも長生きしなかった？）、夫も酒飲むのが好きで。なので、両親の元へと、93年に退職をしてきました（番号34）。 略

2000年に、同級生だった男と再婚して、未っ子が生まれた。母親の体調が優れなくて、義理の両親の家へ上の2人の子どもを連れて同居するようになって、義理の側がその2人の子どもを色々圧迫して、非常に苦しかった。常にその2人を苛めたりして。その夫もあまり妻や子どものことを考えてくれない人でした。酒は飲まないけど、給料を持ってきてくれない。彼のお金は彼の母親が管理していた。また、仲間が来て、私が外出しても制限されていたので、2004年にまた離婚しました。離婚したというか、彼の方が他の人と結婚するからと言ってきて、追い出されました（番号34）。

近年では、法的な結婚という形態や同棲せずに女性が子どもを産み、一人で子どもを育てる世帯も増えているといわれる。それだけ家族の基盤が脆弱になりつつあるのである。

：三女は結婚したことがないですか？

S：次女は結婚していた。学生の三女は結婚しないで、家で子どもを産んでいる。結婚をしたことない。  
ヘセグ長：そのプロセスはこうなんだよ。彼氏ができて、結婚しようという段階までくるが、最近のモンゴルの若者が責任感が薄くて、家庭をつくって、奥さんと子どもの面倒をみる、働かなければいけないとなると嫌になって、置いて行っちゃうのです。勿論それは一部の人だけです（番号22）。

ここでは前者の2ケースは核家族世帯として1世帯のみ居住している女性世帯主、後者の1ケースが未婚の母子ユニットと、世帯として別途登録されているが、夫を亡くしてから親のもとへ頼ってきた女性世帯主とその子どもたちも包摂する拡大家族の例である。母子家庭の形成のプロセスは配偶関係の不安定さ、死亡、そして若い世代の責任感のあり方まで多様に及ぶが、いずれも貧困と結びつく関連であることが推測される。

しかし、女性世帯主の増加はその理由の指摘も含めて、マイナスの要因で語られることが多いけれども、第1に、女性世帯主の世帯形成過程は、女性の精神的・経済的自立過程としてもとらえられること、第2に、それを親族等による援助機能が、脆弱な経済基盤にある世帯形成や生活経営の維持に寄与しているのではないかと横石は指摘している（高橋ほか 2010）。

では、次に、こうした女性世帯主も含む対象世帯で見られる親族による支援関係の実態をみておこう。

## 親族による支援

対象世帯の殆どに(1世帯を除き)現在のゲル集落に定住するまでと定住を始めて以降の生活の過程において親族からの支援が重要な役割を果たしてきている。移住の際の親族から得られた支援については、すでに詳しく触れている。ここでは、労働、子育て、日常生活をめぐる親族、兄弟の支援関係が大きな役割を果たしている様子を確認しておこう。

母：(兄は)彼ら自身たちの生活も抱えていて、うまくいかない方が多くて、それほど支援してくれる余裕がない。彼らの子どもたちもその当時、小さかった。今なら大きくなって出ていっています。私のこの娘を市場で働かせてくれて、給料を払ってくれたりしていました。

母：...うちの兄の嫁が結構いい人で、靴などを渡して、売ってくださいと伝えてくれた。それをそのお姉さんが言ったより少し高く売ったりして、売れない時もありましたけど、その金をすぐにお姉さんに渡すことができなくてそれで石炭を買ってしまったり、後で払う約束をして。お姉さんは私たちの状況を分かっているからすぐに払えなどと言わなかった(番号27)。

両親は私の、子ども2人(上から1、2人目)を連れて、ウランバートル近くのリ別荘地に家畜を飼いながら住むようになっていた。私はウランバートルに、兄の家に住んでいた。給料が下りると両親のところへ、子どもたち用に持って行って、車掌だけの給料で女一人で生活することは難しかった(番号34)。

A：母親が何ヶ月分の年金を前もって借りて、ハシャーなしで大変だろうと行って、建ててくれました。かなり年を取った母親がいます。

：Aさんには母親と妹がいるということでしたが、彼女たちの生活はウランバートルにきてから大丈夫ですか？

A：大丈夫というか。市場で物を売って。中国から品物を買ってきて、ここで売っています。向こうの相手から品物を買った後で代金を払うように、借りてくるのもあるようです。妹は比較的大丈夫です。常に彼女らからもらっています。妹に頼んでもらうのも、妹がいない間に母親からもらうものもあります。たまに、母親とこっそり、妹に言わないでもらっちゃう時もあるのよ(笑)。燃料がなくなると母親がそれを知って、来てもらって帰いなさいと言ってくれるのです。その妹は私のこと、非常に助けてくれています。自分も子ども2、3人いるし、年をとった義理の親が同じハシャーに住んでいて、母親は妹の家に同居しています。なので、その妹のために生きているわけでもないしと遠慮したいけど、ものがなくなるとやむを得ず取りに行っています。長男の身分証明書がなくて、その妹が助けてくれようとしています(番号24番)。

T：兄弟ならいます。たまに来るけど、市場経済のこの時代はそう簡単にいつも来てくれることができません。たまにきて、少しでも援助してくれるのがあります。みんなそれぞれ大変だから、毎回、私に物をくれている人なんかこんな大変な時代には いないからね。誰かの家にも泊まったとしたら、3日経たないで追い出されるかも知れないのでね。そんな時代なんで。だから、まあ、自分たちの都合でたまにきて、子どもたちに少しくれるのがあります(番号25)。

親族が援助してくれることにより、彼らはやっと日々の生活を送ることができる。家族・親族の支援は彼らの生活の生命線、生活保障機能 最後の砦 なのである。

では、この家族・親族関係にない時にどう対応するのだろうか。全くの他人同士、母子世帯同士の共同生活による相互補助である。

2人の子どもを持つこの女(対象者のゲルに、他の母子3人が寄宿して一緒に暮している)母親は病気で起きられない状況。子どもたちは3、4歳ぐらい)も住む家も無くて、大変苦しんでいる者です。旦那さんがゲルを倒して行っちゃいました。それで、彼女は、こちらに一時滞っています。彼女は、もともと路上で石炭売りをやっていた。彼女が食事などを(食品を負担しているようだ)やってくれて、お互いに(助け合っています) こういう状態です(番号33)。

語りの中では、親、兄弟、親戚といった親族の支援関係がこれら世帯の生活への外部支援の中ではもっとも大であり、かつ、その支援のあり方が多様に及ぶことが確認されると同時に、親族関係になくても、人間同士の助け合いの存在を目の当たりにすることができる。

こうした私的支援関係の他には主に、社会保障制度と行政機関による公的援助、そしてNGOなどによる共同的援助の存在が浮き彫りになっている。

#### 社会保障制度による支援

公的支援に関しては、社会保障制度によるものと地域の行政機関(ホロー役所)によるものと大きく二つに見分けてみる事ができる。まず、社会保障制度による支援の実態を見てみよう。

:では来年から年金がもらえるのね。それでちょっとよくなるのではないのでしょうか?

ヘセグ長:そんなに改善されない。障害者年金と定年金は額が同じ位です。定年になったら障害者年金は止められます。どれかです。 略

:今は障害者年金だけで生活しているということですね。

S:はい。81,000トグリグです。それでこんなにたくさんの人を食べさせるのが本当に大変です。

F:世帯の総収入は障害者の年金だけですか?

S:その81,000と児童手当ででしたが、後者はなくなった。今年の正月の時点では子どもの一時支給の70,000をもらった。それ以外の収入はないです(番号22)。

ヘセグ長:子ども手当の25,000をもらっていた頃よかったね、今から考えると。

A:そうです。それをもらっていた頃は、我々のような人にはそれが非常に助かっていたことが今感じられます。こうしてもらえなくなっているとそう思われます。一人3,000トグリグでも二人の分6,000トグリグでも家計を助かっていた。

:新結婚の50万もね

ヘセグ長:それはたくさんの壊れやすい世帯を作ってしまったところもあります。それとは別に、生ま

れた赤ちゃんに10万トグリグを支給していた、それも結構助かってたよ。

：それはまだありますか？

ヘセグ長：やめた。

A：50万も、25,000も、全部なくなった(番号24)。

社会保障制度による支援には、定年金、障害者年金、新婚者一時金、妊婦手当、出産一時金、児童手当、2010年に入ってから2回に渡って1回目では児童を対象に、2回目では全国民を対象に支給されている一時給付金等が語られている。しかし、新婚者一時金、出産一時金、児童手当といった福祉金が2010年度から止められていることを考えると、これら世帯の収入額が一段と減っていることが明らかである。

### ホローの支援

では、これら世帯には、住民とより身近な関係にあると思われる地域の行政(ホロー役所)からどのような具体的な支援が施されてきているのだろうか。まず、各世帯の状況をよく知っているヘセグ長は、子どもたちが教育を受けるように個別に働きかけ、入学に必要な推薦書、証明書の発行などの便宜を図る。

ヘセグ長：(娘さんはこの間教えてあげた)コース(教室)に行きましたか？毎日、1500トグリグの交通費、昼ごはん、そして卒業証書も与えるそういうコースがあって、是非行くように言ったけど、まだ行ってないのね。

娘：どこに行けばよいのか、分からなくて。

ヘセグ長：まずはホローへ行くのよ。願書を書いて、そこにホローの推薦を受けて、持っていくのよ。

こうして私に怒られることを自分たちでやっているのね(笑) 略

：それで、明日行っても大丈夫なんですか？

ヘセグ長：そうですね。人数が揃ってしまうかも知れないけど。とにかく、明日の朝、一番早く行って、願書にホローの推薦を受けて、持って行ってね。(番号27)

これとともに重要なのが、住民に対する次のような物的および精神的支援である。

：...ここで暮らしている際に一番頼りになっているものは何でしょうか？

S：子どもたち、兄弟、親戚、少ないけどいます。また、行政も応援してくれています。燃料(石炭や薪)をもらったことがあります。そういうような支援はあります(番号22)。

：なるほど。ホローからはどれくらい支援してくれていますか？

母：ええっ、結構支援してくれています。できるだけ助けてやろうとしてくれていると思います。勿論毎回、石炭購入代の援助などの対象にしてくれたりはないけどな。

：できるだけという具体的にどういう助けをしてくれているということですか？

## 貧困住民層のライフコースと成人教育の課題

母：身近なものをくれたり、ホローで主催される会談などに呼んでくれたり、精神的な助けをしてくれています。一部の人はガンダン寺へ連れて行って御経を唱えてもらうことに参加させてくれたり、など、小さな物事に参加させてくれています。そんなことに参加していると嬉しく感じます。お坊さんに富を呼ぶ御経を読んでもらうと本当に助かっているような、効果があるような気がします（番号33）。

また、CLC や他の教育機関との協力の下で開かれている成人教育の事業がある。

：そうですね。ホローでは、時々、成人の教育が行われるということでしたが。身近な物づくりを教えたりなど。

母：あっ、そうでしたね。それには私、仕事あるからあまり行くことができないのです。時々、呼びかけしてくれるのですが。靴づくりとか・・・

：昨年、我々が来ていた時に一つのそういう教室が開かれるとって人々が参加したいと登録させていたような憶えがあります。

母：そう そう。無職の子どもがいたら参加させてくださいなどと言ってくるのです。しかし、私たちは自営で物売りをしたりしているから行けないのです。日時などを教えて、きてくださいと言ってくれたりしているけどね（番号27）。

## NGO の支援

こうしたホロー行政の援助と併行して、NGO（代表的なのはワールドビジョン）の支援が住民に知られている。ここでも、困窮した住民たちにとって物質的な援助がもっとも重要である。

：ここでこうして暮らしていると生活に一番よく頼りになってくれるものは何ですか？

T：ここで ですか？ここではOさん（ヘセグ長）など長年近所で暮らしている人がいる。Oさんは昨年の場合だと、ワールドビジョンの石炭、お肉、などの援助につないでくれて、非常に助かった。この人たちが私の生活を助けてくれています。

ヘセグ長：この人は、どうすればそういう物が手に入れられるか方法が知らないのです。ある時は、私、そうしてワールドビジョンなど、どこに何があるか、探しまわっています。今年の冬は石炭と食品の援助をとってあげた。

T：大変助かったよ。その石炭は最近まで使っていた（番号27）。

これとともに NGO はノンフォーマル教育事業をとおした支援に力を注いでいる。

ヘセグ長：ワールドビジョンは直接援助品を渡す事業はほとんどやめて、教育、講座などをたくさん開くようになったので物的援助は少なくなった。 略

母：ワールドビジョンが良さそうでしたね。

：この近くに「トルゴイト」という NGO がワールドビジョンから資金を調達して、活動しているのね。



母：はい。

：そのちょうどどの面がお母さんのお気に入ったのでしょうか？

母：子どもたちを小さい時から教えて(就学前準備教室)いいなと思いました(番号27)。

親族からの支援と違って、社会保障制度や NGO からの支援には条件がもうけられているため、その対象になることはただ収入が少ない、貧困であるだけではなかなかむづかしいということである。

これまでみてきたように、外部支援の実態をお聞きした際に、日々の暮らしを支えている物的支援に関する内容の回答がもっとも多かったが、精神的、教育的な支援、ここで少しだけ触れたが知人(友人や隣人)同士の支え合いの機能も存在している。また、ヘセグ長(ホロー内の区分地域を担当する役員)は地域の住民の中から選ばれており、地域の住民たちと隣人として、友人として、支援者、そしてホローの役員としての様々な付き合いの形態を持って接し、住民と住民、住民と役所間の交流の接点ともいえる機能を果たしていることは注目すべき点であるように思われる。

## まとめ

「極限の生活」とは何だろう。この報告では、その象徴として、極寒のなかでもストーブで暖をとれることもない生活を紹介してきた。調査時は零下10度ほどであったが、冬季のモンゴルは零下40度にもなることがあり、家畜が凍死することも度々経験してきた。それほど厳しい生活である。

体制転換後の経済的な発展の陰の側面、社会の混乱を象徴しているのが離婚の増大であり、形態としての母子世帯の激増である。それは、この地区でも確認されたことである。失業や飲酒の習慣にとまなう夫の暴力や、モンゴル社会の価値観の大きな変化などが要因として指摘されているが、これに対応する生活形態として、親世帯と同じハシャーに同居して生活支援を受けるなどの関係がみられた。この家族や親族による支援関係が生活の維持にとってはことのほか大きな役割を果たしていることもみてきたところである。まさに 最後の砦 なのである。

こうした親族の絆からも 引き剥がされた 人びと、最後の事例こそ、「極限的な生活」といってもよいだろう。社会保障という制度的な支援も、親族からのインフォーマルな支援も期待できない人びと、彼らの暮らしである。これらの人びとに唯一残された方途が、ウェイスト・ピッカーという暮らしである。

## おわりに 成人教育への示唆

モンゴルの体制転換後の社会変動に対峙するノンフォーマル教育実践の特徴と意義を、かつて次のようにとらえてきた(高橋ほか2009)。第1に、モンゴルでは、ノンフォーマル教育はフォーマル教育と同等の価値をもつものとして教育制度上位置づけられている。それは、モンゴルの生活様式の特異性を反映するとともに、大きな社会変動のなかでノンフォーマル教育のもつ多様性と柔軟性が重要な意味をもつこと、第2に、その地域における代表的な教育機関であるコミュニティ・ラー

ニングセンタ（CLC）は、一般行政のもとにその教育環境の整備と教育実践の方向性が決定される構造をもつこと、第3に、このCLCが提供する貧困地区の子どもたちに対する識字教育プログラム、補助教育プログラム、そして、職業教育・訓練プログラムが、彼らの経済的な自立や社会参加を支えて新しい生活を切り拓く条件をつくった意義が大きいこと、などを明らかにしてきた。

今回の調査のなかでも、子どもたちをCLCの講座に参加させようとする親たち、厳しい生活状況のなかで借金をかさねても、大学を卒業させようとする親たちの熱意を知ることができた。しかしながら、これらの世帯の子どもたちが大学を卒業しても、彼らを待っているのは安定した職場ではなかった。ときには、劣悪で、不安定な労働でさえある。私たち教育研究者は、貧困に対峙する教育の意義を強調するのであるが、それは大切だとしても、こうした成人教育の限界も明らかである。

モンゴルの住民たちの生活を支える関係を概念的に図示するとすれば、図3（「貧困と支援」）のように整理できるだろう。まずは、労働への参加をとおして、経済的にも自立することが必要であるが、それが欠けるようなとき、私たちの生活を支えるのは社会保障制度による支援であり、これを含めた行政による公的支援である。しかしながら、この地区の住民たちのなかには住民登録が欠けているために、こうした制度的な支援から排除されつつけている人たちが存在する（番号24、25、31、33）。これを補完するものとしてNGOなどによる協同的支援もあるが、その役割にも限界がある。むしろ、普段の生活のなかで実質的に、彼らを支える最後の砦となるのは家族や親族という血縁にもとづく絆だけでとなっている。この絆さえも断ち切られるとき、ウェイスト・ピッカーとなってその日暮らしの境遇となる。

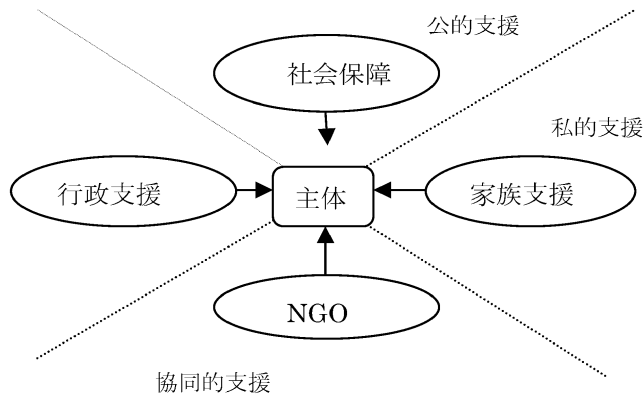


図3 貧困と支援（概念図）

こうしたなかでCLCの実践に求められるのは、地区行政や、この地区のソーシャルワーカーと連携をつくりながら、まずは、これらの住民たちの生活の実情を把握しつつ個別の働きかけ、生活スキルのための教育をとおして住民登録を行うことである。そのことによって社会保障などのサービスを受けてはじめてCLC事業への参加は現実的なものになるし、教育の権利は意味をもつ。

#### 参考文献

1. ダグワドルジ・アディアニャム、エンフオチル・フビスガルト、横石多希子、高橋満「ゲル集落における世帯形成と家族生活 モンゴル・UB市の事例」『日本都市学会年報』VOL.43、2010.
2. 鯉淵信一「モンゴル社会主義下における伝統的家族の変容」アジア研究シリーズ No.56、亜細亜大学アジア研究所、2005
3. 鯉淵信一「現代社会における家族の変容：東アジアを中心に(Ⅲ)」『現代モンゴルの家族関係とその諸問題』アジア研究シリーズ No.62、亜細亜大学アジア研究所、2007
4. 横村久子「市場経済への移行期に伴うモンゴル女性の開発と変化」京都女子大学現代社会研究No.4・5、pp97-113、2003
5. 高橋満、エンフオチル・フビスガルト、ダグワドルジ・アディアニャム、「モンゴルの社会変動と成人教育」東北大学大学院教育学研究科年報、pp69-90、2009

# Life course of people in the poor district and adult education: A research report from the edge of despair

Adiyanyam DAGVADORJ

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Khuvisgalt ENKH-OCHIR

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

TAKAHASHI Mitsuru

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The aim of the study is to bring out what kind of process people underwent to flow into the poor district, Ger (Yurt), Out of the capital, Ulaanbaatar City, how they corresponded to the deprivation there, or why they keep staying in poverty in the first place, after transformation of Mongolian's political and economic system.

Also, to bring out the actual conditions on their share houses by multiple families in "HASHA" (walls), the life security function in the households, etc.

People in this section flow into Ulaanbaatar City, seeking for new work and opportunity for education, after losing their job through demise of socialism corporate entities where they used to work or firing in up-and-down after the system change.

However, by losing resident registration, they also get put out of life security.

Families or relatives support their extreme brutal lives such as being waste pickers and the government or NGO helps with supplement.

Key Words: poverty, ger community, exclusion, relatives support, adult education